

カツセマサヒコ

Masahiko Katsuse

往路、

---

もしくは、

---

ドライブ・

---

マイ（ペアレンツ）・

---

カー

---



corolla cross 100ways special story

「めっちゃガスってるじゃん」

助手席に座っているリョーちゃんが言った。確かに、山の中に建てられた美術館は濃い霧に覆われていて、ネットで調べた景色とはまるで違う、重たい雰囲気醸していた。

「まさに、山の天気って感じだねえ」

平日の日中だけあって、俺らのほかに二、三台しか、車は見当たらない。広い駐車場から、出庫しやすそうなスペースに向けて、車をゆつくりとバックさせる。

「でも、本当に美術館に来るとは思わなかったよ」

シートベルトを外したりリョーちゃんが、上着を羽織りながら言った。

「昔の俺らじゃ、ありえない選択肢だよね」

「タロちゃん、オトナだなんて思った」

「いや、そんなことないって」

「おれ、彼女とも来たことないよ？」

「俺だって、ないよ」

「ないの？」

「ないよ。行かなそうでしょ、美術館とか」

「いや、タロちゃんは、行きそうな髪型してるよ」

「髪型で決めるところじゃないよ、それは」

ピピ、と音がして、ドアのロックがかかったことを確認する。さみーね。冷えるね。山ん中だからね。霧に囲まれた美術館に、僕らは吸い込まれていく。

四月から一人暮らしをすると決めたタイミングで、両親が急に車を買って替えた。兄貴や姉貴や俺を乗せて走ったアルファードがいなくなつて、カローラクロスがやってきた。三人とも家を出ていくし、これからはもつと自由な老後を楽しむぞ、と、両親の決意を露わにしたような新車が、家の駐車場に止まっていた。

俺は、自分から親元を離れるって決めたくせに、なんだかアルファードがいなくなつてしまったことが寂しくて、新たな車によそよそしきを感じていた。たぶん、嫉妬していたのだと思う。まさか、車に。

でもそんなこと、父さんや母さんが知る由もなく、俺は勝手に、一人でおセンチになつて、まあ、どうせ俺はこの家を出るからな、と開き直つたりもしていたのだけど、空気の読めない父さんが、ある平日の朝に、俺に言った。

「新しい車、タローも運転してみろよ」

アルファードは免許を取つてから一度も、ハンドルを握らせてくれたことがなかった。だから、その一言にすつごく、驚いた。なんだか父さんに、「大人になつたな」って認めてもらえた気がした。

それで、じゃあ、今日は授業もないし、ちよつと借りるわ、と、できるだけ新車になんか興味ないフリをして、鍵をもらった。これまでレンタカーしか乗つたことのなかった俺が、初めて自宅の、両親の車に乗れることになった。

「嬉しいじゃん、そういうの」

久々に連絡したりヨーちゃんは、開口一番にそう言ってくれた。

「ね。それでさ、もし暇だったら、一緒にドライブ行かない？　うちの新車、何点か教えてよ」

「おれ、別に評論家じゃないからね？　四輪で走るものなら、なんでも好きなだけだから」

そう言つて、まんざらでもない様子で、リョーちゃんは俺の家まで来てくれた。小学校を一緒に卒業してから、高校時代まではちょこちょこ遊んでたけど、俺が大学に行つて、リョーちゃんも働くようになってから、なんとなく疎遠になつて、でも車つて言われたら、今も車のパークの輸出入などをやってる会社で働いているリョーちゃんの顔が浮かんで、連絡したのだった。すごく久しぶりなはずなのに、リョーちゃんとの距離感は当時とほとんど変わつてなくて、安心した。

「お、カローラクロスなんだ？　いいね。タロちゃんの父ちゃん、若いね」

「そうなの？　全然わかんない」

自転車でうちの前に現れるなり、リョーちゃんは俺よりも車ばかり見て、言った。それにも、やっぱりちよつと、嫉妬した。車に。

「じゃあ、行きますか」

シートベルトを締めて、リョーちゃんが言った。

「うん。リョーちゃん、どこ行きたい？」

「んー、とりあえず、走らせながらでしょ」

どっちかって言えば、乗りたくてウズウズしているのはリョーちゃんの方だったと思う。それでも運転席は死守した。静かにエンジンのかかる音がして、小さな緊張と興奮が、俺の中で回転し始める。

そもそも、ドライブって言って、目的地が箱根ってのが、もうシブいんだよね」

スマホで彫刻の写真を何枚か撮っている間、退屈そうにしていたリョーちゃんが言った。  
「もう俺たちも、おっさんだからね」

美術館の広い庭園は、霧のせいで、どこまでも続いているように見えた。俺はスマホをポケットにしまいながら、前を歩くリョーちゃんに追いつく。

「そのうち、温泉とか行きだすよ」

「俺ら二人で？ ひどい画だね」

「そういうのも、悪くないよ」

さつきから濃い霧のせいで見晴らしが悪く、突然目の前に巨大なオブジェが現れることがあり、その度に二人でおお、と声を挙げていた。リョーちゃんは、展示物にはそれほど興味がないうようで、散歩自体を楽しんでいるようだった。

「おれが免許取ったときのこと、覚えてる？」

「初ドライブで、渋谷行ったやつ？」

「そうそう。あれ、四年前とかだよ。懐かしい」

「リョーちゃん、俺が知る限りでは最速で免許取った人だよ」

「することなかったし、早く乗りたかったんだよ」

あの時は、二人とも、とにかく都会に憧れていて、車で渋谷に行くなんてオトナじゃんと、興奮気味に首都高に向かったのだった。神奈川の奥地で育った俺らの、精一杯の背伸びだった。リョーちゃんは、免許を取り立ての人間とは思えないほど、運転がうまかった。

ゆるやかに蛇行した坂を下つていくと、小さな池があつて、その上に、細い吊り橋が架けられていた。霧なのか、それとも寒さのあまり、水面から湯気が出ているのか、周囲は白い煙に完全に覆われていて、まるで雲の中にいるみたいだった。

「ゲームの中みたい」  
「ああ、ゼルダとか」

「そうそう」

息を吐くと、目の前にも白い雲ができて、それが空気に溶けて、また霧にまぎれた。

「なんかさ」

「うん」

「スマホで調べて、景色良さそうだから行こう、みたく言ったけど」

「うん」

「実際は、景色、悪かったわけじゃん」

「悪かったね」

「でもさ」

「うん」

「これはこれで、いいよね？」

「そうそう。思った。これはこれで、いい」

「うん。予想とは違ったんだけど、別の良さがあったっていうかさ。そういうの、大事だよね」

「わかる。そういうの、大事。人生、そんなんばかりだし」

「そうそう。結局、現状を、よしと思えることなんだよな」

「予想や期待が外れても、落ち込まない方が、楽しいもんね」

霧の中から、知らない鳥の鳴き声があった。リョーちゃんはまた「ゲームの中みたい」って言った。ここには、俺とリョーちゃん以外、本当に誰もいなくて、静かだ。俺は、こういう場所を求めていた気がする。

\*

「河口湖って、どんくらいで行けんのかな」

車のヒーターに両手を当てているリョーちゃんに、尋ねる。

「わかんない。箱根までと、同じくらいじゃない？」うー、さぶ。

美術館を二つ回って、そのうち一つは国立公園とくっついていて、何気なく散歩してみたらかなり時間がかかってしまった。ドライブだからと薄着で来たリョーちゃんは、本当に寒そうに、助手席で震えている。

「今から行ったら、夕焼けくらいは見れるかなあ」

「おー、河口湖？ 富士山と夕焼け、いいね」

「いいよね」

「タロちゃん、天気にもまれなさそうだし、見れないかもだけどね」

「まあ、そんなときは、そんなときでしょ。流石に帰るには早いし」

「箱根で温泉つてコースもいいけど？」

「それはもうちょつと、おっさんになったときに取っておこうよ」  
「そうか、そうか」

河口湖の適当なエリアにピンを立てて、カーナビの目的地に設定する。予想は、一時間半。ギアをドライブに入れてブレーキを離すと、ゆつくりと車は動き出した。

「帰りはさ」

「うん」

「リョーちゃん運転してくんない？」

「なんでよ」

「いいじゃん、疲れちゃったから」

本当は、前に渋谷まで連れて行ってくれたみたいなのに、リョーちゃんの運転する車の助手席に、乗りたくなかったから。

「プリーズ、ドライブ・マイ・カー」

「両親の車でしょ、それ」

「じゃあ、プリーズ、ドライブ・マイペアレンツ・カー」

「オーケー」

リョーちゃんは、助手席のリクライニングボタンを押した。

※この物語の続編「復路、もしくは、ドライブ・ユア・カー」は、文芸創作誌「ウィッチンケア第12号」（2022年4月1日刊行予定）に掲載されます。